

《共同研究スタートアップ研究成果報告 概要・要旨》

＜課題名＞

『民俗・考古資料の分析にもとづくアジアにおける染織・紡織品の比較研究』

＜代表者所属・氏名＞

金沢大学国際文化資源学研究中心、松村恵里

＜共同研究者所属・氏名＞

福井大学教育地域科学部、東村純子

＜研究成果要旨＞

本共同研究の実施にあたり、まず12月17日に金沢大学において第1回共同研究会を開催した。共同研究会では、考古と文化人類学という異分野間の各研究についての報告を行い、浮き彫りにされる課題について、研究者同士意見を交わしながら、繊維を含めた古代の植物利用について、科学分析の分野における最新の情報を研究者間で共有した。今回の研究会にあたっては、東村氏の報告にかかって、共同研究会開催前に小松埋蔵文化センターの下濱貴子氏に協力を仰ぎ、事前に、小松埋蔵文化財センターでの出土品（編組植物製品痕跡、麻糸等）実見も行っている。

各報告会では、松村が「インドにおける伝統的染色技法に見られる特色と問題点」、東村が「考古遺物にみられる機と現在のアジアの民俗にみられる機との比較研究」、佐々木が「古代の編組植物製品に関する科学分析分野における研究についての最新報告」について発表した。これらの各研究を通し、明確化された共通課題としては以下が挙げられる。

1. 考古遺物と民俗・民族資料を通した、アジア地域において衰退傾向にある技法（地機・原始機の利用、漂泊技法、藍染め等）の合理性の確認。
2. 現在の日本の民俗文化を通し、考古遺物としての植物性編組製品との共通点を探ることによる、各地域で使用されてきた編組植物製品の使用目的とその合理性の確認。
3. 遺物の保存・修復、また文化資源としての手工芸製作に係る、植物繊維の腐食（特に鉄漿使用における経年変化の問題）の回避という課題。
4. 染料の同定や、綿布への染色における負担度、および博物館調査における非破壊的調査について、元素マッピング（無機物分析）やFT-IR分析（有機物分析）法などの可能性について今後の協力体制の構築。

また代表者である松村が、3月11日-13日に国立民族学博物館で開催されるシンポジウム『Authentic Change in the Transmission of Intangible Culture Heritage』に参加すると同時に、参加研究者と会することで、今回の共同研究会で明確となった課題について、今後の議論を深められると考える。加えて、3月23日は文化学園服飾博物館の綿染色布資料を実見させていただき、さらに学芸員の吉村紅花氏と会することで、当該博物館における保存・修復に係る課題とその展望についての聞き取りを行う予定となっている。

これまでの博物館資料の調査では、各分野の研究手法が採用されながら、研究が進められてきた。しかし、考古学や保存・修復の側からの調査法からは、人々の日常生活や特定技術の意味などは明らかにされてこなかった。また、民俗、人類学の側からは、科学的な実証力に乏しく、特に技術面の考察においては説得力に欠けてきた点は否めない。しかし、本共同研究のように異分野間での研究を進めることにより、科学的分析に現実的な人間の日常や生活という視点を取り入れることが可能となり、物質を通した「人間が生きるための営み」の検討について、今後、体系的な研究方法の構築が可能になることが期待される。